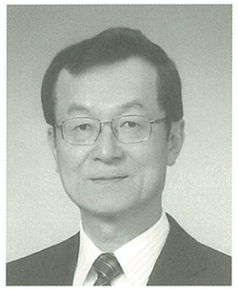
第20回
春日井市交響楽団
定期演奏会

2011年
7月3日(日)
春日井市民会館

主　催　：春日井市交響楽団

後　援　：愛知県教育委員会、春日井市、春日井市教育委員会、(財)かすがい市民文化財団、中日新聞社

ごあいさつ



春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
伊　藤　　太

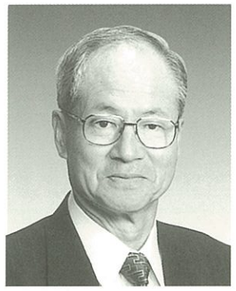
お祝いのことば

このたび、第20回春日井市交響楽団定期演奏会が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

本演奏会は、毎回優れた国際的な演奏家をお招きし、市民の皆様にクラシック音楽に親しんでいただく場として、また、学生と社会人により結成されたメンバーが日々研鑽を積み練習に励んだ成果を発表する場として開催されており、人と人とがつながる文化のまちづくりに取り組む当市にとりまして、大変意義深いものであり、関係の皆様方のご尽力に深く敬意を表す次第であります。

今回は、オペラをはじめとして様々な分野で活躍されている岸本沙恵子氏の指揮にのせて、欧州各国のピアノコンクールで数々の賞を受賞され、主に東海地方で活躍される地元出身の石川馨栄子氏の美しい音色を奏でるピアノ演奏と管弦楽による艶やかなハーモニーが、観客の皆様を魅了することと期待しております。

最後に、本日の演奏会が盛況に開催されますとともに、貴楽団のますますのご盛栄を心からご祈念いたしまして、お祝いのことばとさせていただきます。



春日井市交響楽団
会長

中部大学　学監
三　浦　昌　夫

ごあいさつ

本日は、第20回春日井市交響楽団定期演奏会にお越しいただきありがとうございます。日頃、私どもに多大のご支援をいただき感謝いたしております。

今回は、特に東日本大震災によって、日本中が大きな不幸と不安をかかえたままの日々のなかでの演奏会となりました。被災された皆さまに心からお見舞いを申し上げるとともに、一日でも早い復興を願うものです。

そんな思いを多くの春日井市民の皆さまと共有し、風雪に耐えながら歴史を越えた「3大B」の永久不滅の名曲を聴きながら、元気を出して、きっと来るであろう明るい未来の実現に向かいたいものです。　指揮をお願いしました岸本沙恵子さま、ピアノの協演をお願いしました石川馨栄子さま、またオーケストラの賛助としてご出演いただいた演奏家の皆さまに、お礼申し上げます。

どの曲も、勇気と希望に満ちた、力強い音楽ばかりです。いつも以上に、熱演をお聴かせします。

最後まで、どうぞ、ごゆっくりお楽しみ下さい。

プログラム
Program

ヨハン・セバスチアン・バッハ（1685～1750）
J.S.Bach

トッカータとフーガ　ニ短調（ストコフスキー編曲）
Toccata and Fugue d-moll

ベートーヴェン（1770～1827）
L.v.Beethoven

ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 作品58
Konzert für Klavier und Orchester Nr. 4 G dur Op.58

第1楽章　Allegro moderato
第2楽章　Andante con moto
第3楽章　Rondo Vivave

《休　憩》 ***Intermission***

ブラームス（1833～1897）
Johannes Brahms

交響曲　第1番　ハ短調　作品68
Symphonie Nr. 1 c-moll

第１楽章　Un poco sostenuto - Allegro
第２楽章　Andante sostenuto
第３楽章　Un poco Allegretto e grazioso
第４楽章　Adagio più Andante - Allegro no Troppo, ma con brio

ピアノ独奏　石　川　馨栄子

指　　揮　岸　本　沙恵子

演　　奏　春日井市交響楽団

プロフィール

ピアノ独奏

石川　馨栄子

Ishikawa　Kaeko

愛知県立刈谷高等学校を経て、愛知県立芸術大学音楽学部ピアノ専攻を首席で卒業。桑原賞受賞。同大学院修士課程修了。
パリ・エコールノルマル音楽院ディプロムを審査員全員一致の首席で取得。併せて審査員特別賞受賞。
パリ・ショパンセミナーを受講し、P.ドヴォワイヨン、V.クライネフの各氏に師事するなど研鑽を積む。
これまでに、加藤乃扶子、柴田道夫、神野明、D.ヨッフェ、故G.ムニエ、中沖玲子の各氏に師事。

第6回ヨーロレジョン国際ピアノコンクール第1位（フランス）、併せて審査員長賞受賞、第6回ソフィア国際ピアノコンクール第2位（ブルガリア）、第8回アルカションピアノコンクール第2位（フランス）など、各種コンクールに入賞。第2回名古屋ナポリ賞受賞、奨学金を得てイタリアへ短期留学。

第19回読売中部新人演奏会、日演連推薦新人演奏会（中日賞受賞）、愛知県文化振興事業団主催によるテーマコンサート「音楽への扉」、三井住友銀行主催「ラ・コンセル・ドュ・ミディ」など各種コンサート、NHK-FM「名曲リサイタル」に出演、名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団とも共演を重ね好評を得る。

2002年9月デビューリサイタル以来、電気文化会館ザ・コンサートホールアンコール2003、2度の名古屋ナポリ協会主催によるリサイタル、2005年、2009年東京でリサイタルなど精力的に活動している。
2008年11月のリサイタルにより、平成20年度名古屋市民芸術祭賞受賞。
中部大学非常勤講師

指　揮

岸本　沙恵子

Kishimoto Saeko

神奈川県出身。幼少の頃より、ピアノを始める。
県立希望ヶ丘高等学校吹奏楽部にて、学生指揮者を務めたのをきっかけに指揮者を志す。

2003年3月洗足学園音楽大学声楽専攻卒業。
在学1年次より、同大学附属指揮研究所に在籍。ベーシッククラスを経て、2004年9月、マスタークラスを修了。
指揮を秋山和慶、河地良智、川本統脩の各氏に、スコアリーディングを島田玲子、西川麻里子の各氏に師事。
2003年7月より、東京指揮研究会主催の指揮セミナーにて、ウィーン国立音楽大学指揮科准教授の湯浅勇治氏に師事。
2007年、ローム・ミュージック・ファンデーション受講。指揮を湯浅勇治氏に、スコアリーディング・ソルフェージュを三石潤司氏に師事。
2007年、アフィニス音楽祭のオーディションに合格し、指揮研究員として参加。
同音楽祭にて、読売日本交響楽団正指揮者の下野竜也氏に指揮の指導を受ける。

オーケストラ、吹奏楽、合唱、オペラと幅広く活躍中。

春日井市交響楽団

春日井市交響楽団は、ベートーヴェンの「第九交響曲」の演奏会を春日井市で開きたいという市民の思いから生まれました。1990年（平成2年）11月に創立され、市内の音楽愛好家を中心に、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として活動を始めました。愛称『カポ』（KAPO）は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」（capo　頭・先頭に立つ者）の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる50名。私たちにとって最大の喜びは、一人でも多くのみなさまに演奏会においでいただき、音楽を聴く喜びとともにクラシック音楽が好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。また、「春日井の開かれた音楽の窓」となって国の内外の最高の音楽家との共演にも努めています。これからも、さらに、市民のみなさまに親しまれ、愛されるカポとして、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。

音楽監督からのお話

伝統と反逆 ～前とは逆に、前へ～

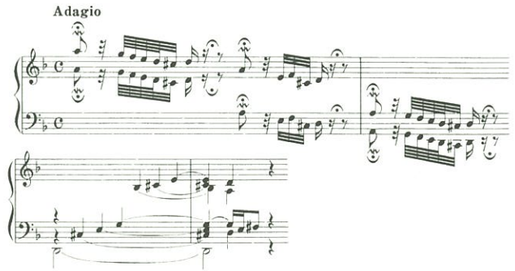
春日井市交響楽団の定期演奏会は、いつも、市民のみなさまに、名曲を名演奏でお楽しみいただけることを志しています。今回は、第20回記念の意味も込めて、オーケストラの正統的な演奏曲目である「ドイツ3大B」による名曲をプログラムに組みました。バッハとベートーヴェンとブラームスです。この偉大な三人の作曲家に繋いで流れるのは、ただ一言、「前とは逆に、前へ」です。

春日井市交響楽団音楽監督　都築正道（中部大学教授）

トッカータとフーガ ニ短調 BWV565

ヨハン・セバスチアン・バッハ（1685-1750）作曲

まず、ヨハン・セバスチアン・バッハの「トッカータとフーガ」から始めましょう。これは名曲です。でも、これは名曲以上のなにかがあります。「トッカータ」はイタリア語の「トッカーレ」（引っ掻く）からきた言葉です。チェンバロやピアノといった鍵盤楽器を弾くときには、まず、演奏家は椅子に座ったら鍵盤を両手で引っ掻いてみます。楽器の音程が合っているかどうかを試してみるのです。これを「トッカータ」といいます。したがって、「すべての音楽はトッカータで始まる」と言っていいでしょう。演奏家は、演奏が始まる前に自分の責任において、演奏する楽器のすべての弦や鍵盤を調律しなければなりません。バッハは、「フーガ」を演奏する前には必ず「トッカータ」や「プレリュード」（前奏曲）を演奏して、楽器を調律したのです。「トッカータとフーガ」と言ったり、「プレリュードとフーガ」と「対」（つい）にして言うのはそのためです。下のオルガン曲「トッカータとフーガ」の楽譜を見て下さい。まさに、オルガンの鍵盤を両手で「ミレミ」と引っ掻いていますね。それから、音階を「レドシラソラ」と弾きます。良く見ると、左手だけでも弾けそうですね。そうです、音階を左手で弾いて、右手は弦を調律しているのです。これが、「トッカータ」の正体なのです。演奏家は、もう舞台に出て来たら演奏を始めなければいけません。演奏をしているような振りをして、実は、同時に調律もしているのです。ですから、「調律」をいかに芸術的に聴かせるかが勝負であり、バッハはいつも見事にそれをやってのけているのです。この「トッカータとフーガ　ニ短調」はその一例にすぎません。それでは、調律の音楽の芸術性をお聴き下さい。本日お聴かせするのは、バッハのオリジナルのオルガン曲を、指揮者のストコフスキーがオーケストラ用に編曲したものです。そうです、あの音楽映画「ファンタジア」でおなじみの編曲です。



さて、次は、ベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第4番」です。実は、これも「トッカータ」から始まるのです。普通のピアノ協奏曲と違って、ベートーヴェンは、まず、ピアニストに和音と音階の「トッカータ」を弾かせます。

ピアノ協奏曲第4番 ト長調 作品58

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770-1827）作曲

ピアノ協奏曲第4番は、ベートーヴェンの36歳のときの作品です。「傑作の森」（ロマン・ロラン）と讃えられた中期の名作の一つで1806年に完成されて、2年後の1808年に作曲者自身のピアノでウィーンで公開初演されました。このとき交響曲第5番「運命」と第6番「田園」も一緒に初演されました。ヴァイオリン協奏曲も同じ1806年に完成されていて、歌劇「レオノーレ（フィデリオ）」もその前年に初演されています。正に、この時期は百花繚乱の豪華さで、巨木の立ち並ぶ「傑作の森」が音楽史の一角を占めています。各々の巨木たちのたたずまいは、その多様な個性とその偉容な姿を誇るものです。どの曲も、そのオリジナリティこそが生命です。逆説的ですが、完成された様式を誇る芸術作品は全て、その様式を自ら壊そうとして作用するものです。この第4番のピアノ協奏曲を、協奏曲として完全なものにしているのも、その独創性です。それが、ピアノ・ソロから始まる「トッカータ」なのです。

第1楽章（ほどよく快速に）ト長調・4／4拍子　協奏風ソナタ形式

冒頭からピアノが第1主題を弾き始めます。それは、いままでのピアノ協奏曲にはない思いきって大胆なものであるにもかかわらず、バッハでおなじみの「トッカータ」であって、親しみやすい、懐かしさを感じさせる響きでもあるのです。この静かに始まるピアノのソロは、私たちに緊張感を与え、どの音も逃さないすべてを深く聴く姿勢にさせます。そして、それは従来の協奏曲にありがちな技巧と華麗さを信条とするものとは違って、この協奏曲が深い精神性を語るものであることをこの「トッカータ」は告げています。

第2楽章（ゆっくりと、動きをもって）ホ短調・2／4拍子

暗く沈んだ音楽で、とても短いものです。オーケストラも弦楽器だけであり、ピアノもソフト・ペダルを踏んだままです。この僅か72小節の中にとても高貴なものが隠されています。「獣たちを黙らせたオルフェウスのハープのようだ」といったのはリストです。そして、切れ目なく次の楽章へ入ります。

第3楽章（活発に速く）ト長調・2／4拍子　ロンド形式

一変してとても大規模（600小節）な終楽章です。まず、弦楽器だけで悦びのロンド主題を奏し、ピアノが技巧を凝らして主題を華麗に装飾します。滑稽さが機知を含み、陽気さが洗練された悦びになっていくところは、いつもながらベートーヴェンのロンド変奏の醍醐味です。全体は5部に分かれています。最後は「天体的な正確さでその陽気な騒ぎに荘厳さを与えて終わる」（トーベィ）のです。

「3大B」の最後のブラームスがベートーヴェンから受け継いだものは、もっとも重い課題「前とは逆に、前へ」でした。

交響曲第1番　ハ短調　作品68

ヨハンネス・ブラームス（1833-1897）作曲

ブラームスが最初の交響曲を完成させたのは、なんと43歳（1876年）の時でした。第1楽章が書き始められたのが1855年（22歳）といわれていますから、20年以上にわたって推敲を重ねてきたことになりま